

テーマ『特別支援教育—子供の困り感の理解』

令和元年9月28日(土) 9:00-10:00 応接室にて

参加者 保護者5名(+お子さん1名)

川中子 おはようございます。ご参加いただき、ありがとうございます。今日はお知らせの通り、「子供の困り感の理解」ということで、第三吾嬬小学校の特別支援教育についてお話ができればと考えております。では、まず、皆さんに見ていただきたいものがございますので、そちらを見ていただいてから話に入っていきたいと思っております。

YouTube 動画視聴

1 FNN NEWS 報道ステーション「裏切るなら許さない」グレタさんの訴え (19/09/24) 3分

2 ADHDのお子さんの日常：アニメ「正しい理解のために」 日本イーライリー株式会社 ADHD 情報 7分

川中子 ありがとうございます。今、二つの映像を見ていただいたんですが、二つ目は「ADHDの理解のために」という、お医者さんが作ったもので、とてもよくできていますよね。本当にこういうお子さんはいますし、こういうお子さんがどういうことに困っているかっていうのがとってもよく表されています。最初のやつは、今、話題になっているスウェーデンのグレタさんという女の子ですね。環境問題で今とても注目されていますが、彼女がツイッターの自己紹介のところに、私はアスペルガー症候群なんだ、と書いていたんですね。今、この「アスペルガー症候群」というのも発達障害の中で非常に注目されていて、世の中にはたくさんそういう人もいて、中には活躍している人もたくさんいますね。一つのことにもものすごく秀でていて、成功している人もいるんですが、コミュニケーションに困難を抱えているという困り感をもっている、ということなんです。今日はこんなことについてお話しするきっかけにと思って見ていただいたんですが。

それでは、まず、簡単に自己紹介もかねて、普段お子さんのことですか、学校の様子を見ていて感じることなどがあたらお話しいただけたらと思っております。では、こちらからでよろしいですか？

Aさん 3年生の男の子の母親です。よろしくお願いします。家に帰ってくると、「ママ、今日も先生に怒られたよ。」ということが多くて。どうせなら、褒められたよって言う話を聞きたいな、と思いながら。「なんで怒られたの？」って聞くと、言いたくない、って言うんで。「気になるから教えてほしいんだけど、言いたくないならいいよ。次は気をつけてね。」とさざっと流しています。

Bさん 4年生と2年生の保護者です。困っていることは、さっきの(映像の)男の子と一緒に、うちの子も朝の準備をしている間に、何か違うことをしてしまって、声を出してしまうんですが、親として、感情をコントロールするのが難しいなと思っています。

Cさん 4年生の女の子の母です。うちの子は、極度の恥ずかしがり屋で。だんだん慣れては来ているようなんですが、本当に恥ずかしがり屋で、それがちょっと困っています。

川中子 初めて暗唱に来てくれたときも、緊張して泣き出してしまって、私も困ったんですが。でも次からはすらすらやって、今はもう全く平気そうですよ。

Cさん 最初が特にだめみたいで、それで、すぐ泣くんです。

Dさん 2年生の子の母です。うちの子は2年生なんですが、上に3人いて、要するにできる人たちを見て育っているので、甘えん坊の反面、自分に対してストイックなのかな。甘えてできないって言うわりには、できない自分が悔しくて、悔しさでわーっとなってしまったり。昨日も工作をつくったら、自分の思うようにできなかったようで、そうしたら、学校行くのやだ、と言って泣いて。校門のところまで連れてきて、高学年のお姉さんたちに連れられて。行ったら、けろっとして、今日の図工は楽しかったと言ってました。できる人たちの中にいるので、できないことに対する悔しさとかの気持ちとの葛藤があるようです。そういうところでは、どうしてあげたらいいのかな、と思っています。

Eさん 3年生の男の子の母です。今、困っていることは、この5月から野球を始めまして、やっている時間ずっと見ているわけではないんですが、どうやら、

練習の間に思っていることをすぐ言ってしまって、お友達にいやな思いをさせていることがあるようでして。こういうときはこういうことを言うてはいけないよって教えなければならないんですが、それが何種類も必要で、コミュニケーションの部分で困っているところがあります。

川中子 ありがとうございます

私のおうちにも4人、女の子なんですが、いるんですが。幸いみんな元気に育ってくれているんで助かっているんですが、子育てって事では、私は母親に任せっきりで反省しているところです。4

人いると、それぞれがいて。3人目の子が一番大変でして、母親も育児ノイローゼ気味になっていました。その子もようやく今年で大学卒業して、来年の春から社会人になるかななんて言っているところなんですが。その子のことは、私も学校の授業参観とか見に行くと、はらはらしてしまって。「ほら、先生！ここにまだ分かってない子がいますよ！見てあげてよ！」なんて思っていました。私自身も自分が教えているとき、こういう子のことを見ていないんだろかななんて反省したりしました。いろいろ、親として困ることがないなんてことはあり得なくて、困ることが親の仕事なんじゃないかなって思うんですよ。

第三吾嬬小学校でも特別支援教育というものがあって、特別支援教室というのがあります。かがやき学級と言います。今日は特別にコメンテーターとして、本校の特別支援教室専門員というお仕事をされているOK先生にも来ていただきました。O先生には、後ほど、かがやき学級のお話などもしていただく予定です。

「特別支援教育」というと、何か特別な子に対する教育みたいな感じがするかもしれませんが。実は、40人のクラスがあって、40人の子供がいると、みんな「特別」なんです。普通、っていうカテゴリーにわけられることもできるかも知れないんですが、一人一人の子は、みんな特別に見てあげないといけない。しかし、一人の先生が40人の子を特別に見るのは難しいので、それなりのテクニックが必要になってくるわけです。さっきの映像の、困ったなあって言っていたお母さんですが、じゃあ、どうしたらいいんだろうという事については、あのあとたくさんの動画がありまして、こういうときはこういう対応をして行きましょうって。それをみるととてもわかりやすいんですが、今日はそれをずっと見ているわけにもいきません。一人ひとりをみんな大事にしていく、っていうのが「特別支援教育」なのかなって思います。その中でも、ある特性をもったお子さんには、その子なりのプログラムをもってあげることによって、その子なりの課題を解決に導いてあげられるのではということで、「特別支援教室」というのも数年前に各学校に作られました。それまでは、何校かに1校だけそういう教室があって、そこに親御さんが送って行って1時間、2時間学習して、また戻ってくるという「通級学級」という制度があったんですが、今は送り迎えも大変だし、そういうプログラムはもっと必要とされるようになって、各学校にそういう学級を作ることになりました。かなり、ニーズとしても高まっています。私もたまに、教室の様子をのぞくんですが、少人数で本当にその子の課題にあったことを教えたり、数名のグループでコミュニケーション学んだりする学習をしています。それでは、O先生。先生の自己紹介と、かがやき教室についてお話しいただければと思います。

O先生 よろしくお願ひします。私は、横浜の中学校で音楽を教えていました。一度退職した後、どうしても特別支援の方に関わりたいと、こちらの仕事を選んで今はこちらに赴任しております。

今、かがやき教室には29名のお子さんが通っています。一人週に2時間。1時間はかがやきの先生と1対1で授業をしています。授業はそのお子さんによってそれぞれで、例えば目の動きがうまくできなくて形をうまくかけない、ひらがなの形がおかしいと言う場合、目の動きがおかしいこともあるので、それに特化した訓練をしたり、算数だけ苦手だって言う場合は、やさしいところからひもといてやったり、あるいは対人関係が苦手、どうしても強い言葉を言うてしまうというお子さんには、こういうときにはどういう風に言えばいいんだろうね、っていうロールプレイングの学習をしたりと。その子に合った、その子が今力をつけたいことについて先生が1対1で教えてくれる。



それからもう1時間は、3人の先生がいらっしやいますので、3人の子供が一緒に動いています。その3人の子たちが集団になって、お互いに助け合うとか、勝っても相手をなじらないとか。すごく勝ち負けにこだわるので、負けても泣かないとか。あるいは、こういうときはこういう声かけをしようという、そういうコミュニケーションのお勉強をする。協力する、ここは黙っている、ここは見守る、ここは励ます、というそういうお勉強をします。一朝一夕でよくはなりません、ちょっとずつご本人の成長と相まって、何か成果が出てきていると思います。

コンセプトは、「障害」「発達障害」というと、何か悪いもの、病気みたいに思う人もいますが、私は音楽が他の人よりは上手です。でも、残念ながら、走るのには苦手で、あわてて走ると転びます。私はピアノは得意だけど、走るのには苦手。それと同じです。人と関わっていくのが苦手なだけなんです。あることに目が行ってしまうと、そこから離せなくなるだけなんです。それを改善していったあげることが、その子にとっては得策だと思います。

で、だいたいそういう子は、小さいときに怒られています。いろんな人に怒られていると思います。お母さん方も、そういうお子さんには、ついつい怒ってしまうこともあるかもしれません。その子がそういうことになっているのは、お母さんたちの子育てのせいではありません。それは、その子がもって生まれた、私が体育が苦手なのと同じような苦手感。その子に合った声かけとかやり方をしてあげると、絶対よくなっていくと思いますので、この18歳くらいまでの間を、うまく育ててあげると、大人になってあまり困らなくなるのではないかなと思っています。



えー、ここに自閉症の方が書いた本があります。「あたし研究」という本です。これを読むと、自閉症の方って、ああこういう風に見えるんだ、ってよく分かります。ちょっと紹介します。例えば、なんであの子たちは整理整頓ができないのかということ、(本を見せて)ここからはさみを出してください、っていわれると、我々ははさみだけをチョイスできるんですが、それが苦手な子たちは、はさみ、鉛筆…全部見えてしまう。そうするとそれを一つずつ出して、はさみを選ばないとはさみが分からないんです。そうすると必ずとガチャガチャになりますよね？ そういうときは、並べてあげて、とったら他のをしまおうね、っていう、なんでそんなことするのと言うのではなく、そういう声かけをしてあげましょうという事です。もう一ついいですか？

これはシルバーシートのところ描いてある絵です。自閉症の人は、そのものしか分からない。これは赤ちゃんがいる人、これは杖をついている人、足をけがして松葉杖をついている人の絵なんですね。彼女(著者)は、おなか痛くなってもシルバーシートに座ってはいけなそう思っているんですね。我々だったら、そのグレーな部分を想像して、こういうときはここに座ってもいいんだと思いますよね。彼女は今度は手を骨折しました。でも絵は脚だから、私は該当しない、と。で今度は脚を折って、やっと私はここに座れると思ったという。要するに、見たものをそのままに理解してしまう人がいるということを気にとめておいてください。

最後に彼女が、「私のことを支えるもの」という文章があるんですが、「自分の事をまるごと応援してくれるファンが、自分にはいる、という確信は生きていく上でとても大切な事になると思います。私もこれまでやってこられたのは、そのときどきにふさわしいファンに出会えたからです。」支えてあげてくれる人がそばにいる。それは、お父さん・お母さんが一番身近ですから、ぜひ

お子さんの特性を考えて接していただければと思います。「あのお子さん、何？」なんて言われることがあるかもしれませんが、そんなのは全然関係ない！それはお母さんの子育てのせいではありません。ですから、そういうものから、ぜひお子さんを守ってあげていただきたいなって思います。

川中子 ありがとうございます。かがやき教室の事ですか、三吾小の特別支援教育のことですか、O先生に聞いてみたいことはありますか？

Dさん 聞いてみたいこと、というか、実は高校生になるお姉ちゃんが、三吾にはなかったんですが、押上小にある「ことばの教室」に通ったんですね。今のお話を聞いていて、その当時の対応してくださった先生方のことを思い出してその通りだなあって思いました。

私は、その頃から、いつ三吾でやってくれるようになるんだらうって思っていました。これだけ大規模な学校なんですけど、四吾には特別支援学級があって三吾にはないじゃないですか。それと、長男の時に、近くにダウン症のお子さんが出て、その子は特別の学校に通っていたんですが、6年生くらいの時に一度体験も含めて三吾に来る話があったんです。子供たちにも話があって、楽しみにしていたんですが、結果的にその機会がなく、残念ななって。同じマンションにその子も入れて3人同学年の子がいたので、いいチャンスだなと思ったんですが。これだけ大きな学校で、統合もしないでやってきていて、どうしてそういうところできないのかなって残念に思っていました。子供の心の教育も含めてすごく大事なことだと思います。長男が保育園で、赤ちゃん言葉がなかなか抜けなくて、最初の子で自分で自分に責任を感じていて、障害とかがあるのかなとすごく苦しんだ…その当時福祉の仕事をしていたんですけど、それでも苦しんでいた時期があって、その時年上のお父さんから「大人になってしゃべれない子はいないんだから、全然問題ないよ」って一言言われただけで、全部苦しみがなくなったりしたことがありました。そういう、気を遣うでもなく、当たり前のことを当たり前にかけてくれたんですね。その後、お兄ちゃんは学校に入って問題なく。そういう経験があって、今度長女の時に、「さしすせと」と「かきくけこ」の発音が悪くて、よくそういう子がいるって言うのは聞くんですけど、困っています。それを発信する勇気がなく。お兄ちゃんの時は直ったから大丈夫かな、障害かな、って。そうしたら、発達障害というかあるお子さんのお母さんから、押上で「ことばの教室」行ったらいいよっていうのを初めて聞いて、面談に行って、結局1年生1年間通ったんですけど。そうしたら、ああ、こういうものなんだって驚くくらい、何て素晴らしい場なんだろうって思ったんですね。知らなくて損したと思いました。サ行、力行の発音が悪いのは、親のしつけが悪いのかな、その子自体の機能の問題かなって思っていたんですけど、大人でも英語の発音がうまくできないのは、舌の動きが分からない、最初から自転車に乗れる子はいないけれど練習すれば乗れるようになるというのと同じように、その舌の動きを教えてあげれば言えるようになるんだよ、っていわれて、ただそれだけなんだ、障害じゃなく、知能に問題があるわけじゃなく、自分にその舌の動きが習得されていないから言えないんだと分かってすごく安心しました。その時同じ学年にもう一人通っていて、毎週木曜日に押上に連れて行って、迎えに行くとやっていた。どんな勉強かなと思ったら、例えば、舌の動きを覚えるのに、舌の先に卵ボーロを乗せて落ちないように空気を出すと、ちり紙を前に置いて空気を出すと、ヤクルトをすごく細いストローで飲んで、吸うとか。確かに、うどんを吸うとかが苦手だったんです。子供は楽しくやって、できないことを劣等感をもってやっているのではなく、遊び心というか、楽しんで覚えられます。終わったら、ちょっと楽しいことを、トランポリンとかやらせてもらえたんです。遊ぶ時間を設けてくれて。マンツーマンで。こういう教育の現場があるって初めて知って、そういう先生方の取組方法に頭が下がる思いだったというか。そのおかげで、1年間で直って…。お友達は何年か通ったんですが、6年生の時は応援団長にまでなって、言葉を積極的に出すような子になって。そこに通ったことの意味があったなあ、と。知らない、どうしてしゃべれないんだらうってだけですが、知っていれば、ああ舌の使い方が分からないんだなって思うようになりますし。私自身は介護とかそういう勉強をしてきたにもかかわらず、まだ知らないことが多くて、そういう経験も4人4様で。そうやって学ぶことで、寛大になるというか。若い頃は手が出てしまうこともあったんですが、待つてあげられるような気持ちができるようになって。親の、そういうことに対する教育というか、「いいんだよ、利用して」って。子を通して親も知ることなんだよって言うのを、もっと発信してほしいと思って、三吾にも特別支援教室ができたって聞いて、ああやっとできたんだって思いました。もっともっと、親に知ってもらって、困ったら相談して、短期間で

も使ってもらうとか。それが子供が成長する過程で必要なことなんだって、発信して。4年生になってサ行が言えなくていじめられたって話も聞いたことがあって、そこから初めてことばの教室に行ったっていうのを聞いて、もっと早くから訓練していただければいいこともなかったって思うんです。小さいうちに解決してあげるのがいいんだよ、って、通ってることは恥ずかしいんじゃないっていいことなんだって、前向きなことなんだって、もし誰かに聞かれたら声を大にして言いたい側なんです。通常の学校教育に並んで、トップに出して、一緒に改善していきましょうって言っていい取組かなって思います。長くなってしまっ…。

川中子 今、お話ししていただいたことは私も感じていること何ですけれど。今まで学校って言うのは一斉指導で、みんな同じ事をできないといけないっていう教育をしてきました。明治からずっと。今、今度新しい指導要領っていうの変わるんですけど、その指導要領から先のが目指していくのは、日本はこれまで画一的な人材を育ててきたんですが、これからはみんな同じではだめだという、みんな違う方向を目指す教育が変わっていかねばいけません。それぞれ違う人が集まって、いいものを創り出していくことができるようになって行かなければならないとなってます。実際、社会はみんなが一つの価値を大事にしているとか、これが当たり前、というのが無くなってきていますよね。これから、もっとそうなっていきます。

ただ、そうはいっても、「普通じゃない」って思われることもあるわけでして。先日もある保護者の方から、お子さんが学校でこうこうこうでした、とお伝えしたら、「もうそういう事はかり言われて、私も困ってます。」という話でした。まあ、お母さんも困っているんですけど、一番困っているのは子供の方で、本当のことを理解されずに、怒られて怒られて… 怒られているうちに、自分ってだめなのかなと自己肯定感が下がってしまうという二次被害が起こってしまうんです。だから、小さいときからその子に合ったケアをしてあげること、それを少なくしていく、コミュニケーションがうまくとれるようになって行くっていうのがあるんですね。

それともう一つしてしまうのは、そういうお子さん、さっきの動画に出てきたみたいに「消しゴム貸して」っていつも取っていつも取ってしまう子。勝手に遊んでいるところに入ってきて、順番も抜かして邪魔をしてしまう子っていうのを考えていくと、そういう「被害を受けている子」も学校の中にいるんです。その子の親御さんは、心配して、「あんな子がいる教室に入れとくわけにはいきません！」とかいうのもなくもない、「あいう子はよその学校にやっちゃってください」なんて言われることもあります。ですが、私たちは、どっちのお子さんも大事です。どっちも大事にしていかなければなりません。保護者の方にしてあげれば自分の子供の利益を優先しているわけですが。ただ、私はやはり、特別な支援っていうのは「一人一人の事を見ていく」ということで、それは通常学級でも、すべての子供たちに必要な支援なのであって、それは特別支援学級だけでなく、大事にしていきたいというのが三吾小の教育だと考えています。そこで、教育目標の一つに「共生 思いやりをもち、共に生きる人」というのを入れました。これは、私たちが社会的に生活していく中で絶対必要な考え方ですので、子供たちに身に付けてほしいと思っています。

今日はもう時間がきてしまっているんですが、最後に一つ、絵本を紹介したいと思っております。子供たちが生活している、この学校と言うところ、子供たちの社会って言うのがどういうところなのかっていうのがよく表されていて、私はこういうのをすごく大事にしていきたいな、って考えています。

「はせがわくんきらいや」っていう、すいぶん古い本で、私が生まれた頃のことなんです。関西の方が書かれた本なので、私が読むのはあまり具合がよくないとは思いますが、ちょっと読んでみます。

絵本「はせがわくん、きらいや」 朗読

川中子 子供の世界って、こういう世界だと思うんです。親は、この「はせがわくん」と一緒に遊ぶんじゃないとか言ってしまったりするんですが、ちょっと困っちゃう子っているんですけど、その困っちゃう子と一緒に学ぶこと。この「はせがわくんきらいや」って言うてる、ちょっとやんちゃな男の子にとって、長谷川さんと一緒にいて学ぶ事って言うのは、大事なんじゃないかな。だから、いろんな子が一緒に育っているっていうのが、学校というところの

いいところであって、そういういろんな子がいる中で、いやな思いとか、うれしかったり、悲しかったり、いろんな思いをしながら学んでいくんじゃないかなというのを、私は、この三吾小でも大事にしていきたいと考えています。今日はお集まりの皆さんが、そういうのを応援していただく皆さんであっていただければと願っています。今日は本当にありがとうございました。

○先生 もし、悩んでいらっしゃる方がいたら、相談してみたらって言ってあげてください。



※ 紹介した絵本は、三吾小にあります。

『あかし研究』 小道具モモ・著 クリエイトかもがわ 発行



『はせがわくん きらいや』 長谷川集平・著 復刻ドットコム 発行

